

「インタビュー・プロジェクト」

国際教養学部 アジア学科 梅村 修

1. はじめに

「変わらずに生き残るためには、変わらなければならない」

ルキノ・ヴィスコンティ (Luchino Visconti) 監督の「山猫」という古い映画の中で、主演のバート・ランカスター扮するドン・ファブリツィオ公爵がつぶやく科白である。

ワンパターンでやっていると、どんなに優れた仕事もかならず限界が来る。そして、否応なしに変わらぬおれにない。要は、環境の変化に吞まれて受け身な気持ちで渋々変わるのではなく、みずから機敏に変わっていくことだ。そうすれば、当初の志はそのままに、変わらず生き残ることができる。

「インタビュー・プロジェクト」は、本年度、はや 4 年目を迎えた。毎年、留学生対象の「日本語読解上級 1・2」の授業の中で行われている。

望外なことに、「インタビュー・プロジェクト」は、2007 年度下半期の「朝日・大学パートナーズ・シンポジウム」に採択され、新聞紙上でも大きく取り上げられた。2008 年 2 月 2 日には、「隣の国から見た日本の教育～ゆとり教育は失敗なのか～」という統一論題で、学外から著名なパネリストを招いて、パネルディスカッションが行われ、400 名以上の聴衆を集めることができた。当日は、インタビュー・プロジェクトに参加し、教育問題に取り組んだ 3 名の留学生（温都蘇さん、姿麗雅さん、張春城さん）が登壇し、堂々と成果を発表した。

しかし、4 年目ともなると、指導する私はさすがに飽きてきた。疲れてもきた。一斉授業と違い、徹底した個別指導だから、しこたま手間暇がかかる。インタビューをお願いする教職員への気配りもたいへんだ。そのうえ、留学生が書き上げてくるレポートには事実誤認や妙ちくりんな日本語が満ち満ちており、春休みを返上して編集作業をしてもおっつかない。

前途に控える悩ましい気苦労と膨大な仕事量を思うと、正直に言って、春学期の最初の授業は気が重かった。

そのとき思い出したのが、冒頭のルキノ・ヴィスコンティの名言だ。ここは一つ機敏に、前向きに変わっていこう。同じことを漫然と繰り返していたら虚しいばかりだ。前年までの反省点を活かして、何か新しいことをやろう。昨年度は「朝日・大学パートナーズ・シンポジウム」に打って出た。今年も、ささやかでも、なにか新鮮な趣向を凝らしてみよう。そう考えて、気を取り直して臨んだ「新・インタビュー・プロジェクト」の成果を報告する。

まず、例年同様、「インタビュー・プロジェクト」と、それに先立つ「読解フィールドワーク」

の定義や背景を説明し、その教育目的を明らかにしておきたい。そして、新たな授業実践とその成果、そして残された課題を報告する。

2. 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の定義

「インタビュー・プロジェクト」とは、外国語の学習者が、ある話題について当該外国語で聞き取り調査をし、それをまとめるプロジェクト・ワーク、広義の体験学習の一つである。一方、「読解フィールドワーク」とは、この「インタビュー・プロジェクト」に先立つ学習活動と位置づけられる。すなわち、自分の興味や関心の所在を発見するために、広く様々な文献に当たり、インタビューのテーマを絞り込むために行われる活動である。

このように、「インタビュー・プロジェクト」と「読解フィールドワーク」は、連動しており、どちらか一方が主で、どちらか一方が従、という関係にはない。すなわち、「インタビューという将来のタスクのために、日本語の文献を読む」という面もあれば、「日本語の読解作業を意義のあるものにするために、インタビューという目標が設定されている」という面もある。

このことを敷衍すれば、次のようにならうか。

周知のように、フィールドワークとは、教室や研究室を出て、現場で調査したり、観察したりする研究手法をいう。読解におけるフィールドワークとは、そのアナロジーであり、教材として用意された教科書やテキストから離れて、新聞、書籍、雑誌、インターネットなどの生の文章を、自律的・主体的に読み進めていく活動を意味する。この活動を通して、「自分が本当に興味を持っていることは何か」を留学生自身が発見する。興味のあるテーマさえ発見できれば、日本語の読解は楽しいはずである。さらに問題意識が深まれば、日本人にインタビューして確かめてみたいことも、おのずと出てくるにちがいない。

また、近い将来、日本人にインタビューを敢行しなければならないとなれば、インタビューイから有意義な発言を引き出すために、自分の関心のありかを探り、それを深めて、新聞や雑誌など、さまざまな日本語の言説に触れようとするにちがいない。

3. 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の背景

実際の授業について述べるまえに、筆者が留学生対象の「インタビュー・プロジェクト」を思い立った事情を簡単に述べる。

留学生にとって、大学での学習の大半は、講義を聴くこと、文献資料を読むことに費やされる。したがって、留学生が日本の大学で学習を滞りなく進めていくためには、なにはともあれ、日本語で情報をインプットする能力の養成が先決である。そのために、1、2年生を対象に、日本語の

読解と聴解の科目が設置されているのは、理にかなっている。

ところが、大学における日本語の読解・聴解の授業には、多くの難しさがある。

第一に、差し迫った日本語の学習動機に乏しい。留学生は、大学入学という明確な目標をクリアしてホッとしている。その上に、さらに高度な日本語力を学び直そうとはなかなか思わない。

第二に、大多数の留学生にとって、日本語の習得は、留学の目的ではなく、手段に過ぎない。彼らの目的は、日本の経済発展のからくりやハイテクの知識を学び、学位を取得して帰国することである。日本語学習は、いわば「急がば回れ」の方便であり、足りない日本語はできれば実地に学びたい、というのが彼らの本音である。

以上のような困難にくわえて、授業の内容面の難しさも指摘しなければならない。

すなわち、多くの留学生にとって、日本語の授業中にあてがわれる読解教材や聴解教材は、学ぶ必然性に乏しいのである。専門科目の授業で使うテキストの読解や聴解ならともかく、自分の興味や関心からかけ離れた文章を、受験勉強でもないのに、なぜ読み解かなければならないか、聴き解かなければならないか。かといって、日本語教師からすれば、専門も関心もさまざまな留学生を、一様に満足させる教材など用意できるわけもなく、結果的にステレオタイプな日本(人)論の類を、「日本語の訓練」という名目で押し付けることになってしまう。無理強いされたテキストの解説がおもしろいわけがない。やがて、留学生は日本語の授業に、たいした期待を寄せなくなってしまうのである。

4. 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の教育目的

こうした大学における日本語の読解・聴解の授業にまつわる難しさを、どうしたら打開できるか。自問自答を繰り返し、たどり着いた結論が「読解フィールドワーク」と「インタビュー・プロジェクト」だった。その教育目的は、次の3点である。

- (1) 日本語の読解・聴解の授業を、留学生にとって、もっと内発的動機に溢れた有意義なものにしたい。言い換えれば、ある明確な目的をもって、読んだり聴いたりする授業を展開したい
- (2) 既成の日本語の談話教材、なかでも読解教材には、テーマや論旨に著しい偏りがある。また、留学生が抱く日本(人)観には、こうした偏向した読み物からの影響が少なくない。そうしたステレオタイプの日本(人)観を打破して、日本(人)の多様性を発見するような授業を展開してみたい。
- (3) 留学生は、大学内の日本人とまじめに率直な議論をした経験が少ない。また、日本人(一般学生や教職員)も留学生を遠巻きにして近寄ろうとしない傾向がある。留学生、日本人

双方のインターアクションを高めて、両者の気づきを誘発したい。

おおまかに書くと、上記のような意図の実現のためにシラバスを組み立てた。中でも、1. と 2. は筆者長年の思いであり、過去にもタスク・リーディング (task reading) の試み、多読 (extensive reading) の試みなど、いろいろ試してはみたものの、一度として手ごたえのある授業ができたことがなかった。上の授業目的を達成するために計画・立案したシラバスが「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」だった。

5. 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」のシラバス

■ 1. 動機付け

まず、のっぴきならない課題を留学生に宣言する。それは

「夏休みが明けたら、日本人に聞き取り調査 (インタビュー) をして、その成果を報告集にまとめて出版する」

という表明である。そして、

「いいインタビューをするために、春学期から準備を進める。まず、日本や日本人について、自分がいちばん興味や関心が強いテーマを探す。そして、問題提起をし、仮説を設定する。そのためには、たくさんの文献を読み漁ってほしい」

とぶち上げる。すなわち、教室を離れて、図書館やウェブサイトを読解のフィールドにして、自分の興味や関心の赴くまま、好きな文章を読み深めていってもらいたいと宣言する。そして、この活動を「読解フィールドワーク」と名づける。

■ 2. 授業目的の説明

まず、従来の日本語読解の授業のイメージを払拭してかかることが重要だと考えて、授業のはじめに、次のように「読解フィールドワーク」のねらいを説明した。

- (1) 「読解フィールドワーク」は、秋学期からの「インタビュー・プロジェクト」のためのテーマ探し、およびテーマの掘下げのために行われる。
- (2) 「読解フィールドワーク」は、教師主導で同一のテキストを一緒に読み進めていく教室活動ではない (そもそも、専門も関心もさまざまな留学生を、一様に満足させる読解教材など存在しない)。「読解フィールドワーク」では、学生が読みたい文章を自分で探し出してきて読んでもらう。

そして、次のような注意を促した。

『読解フィールドワーク』の時間は、一斉授業ではないから、その学習成果は自己責任によ

る個人差が非常に大きくなる可能性がある。すなわち、学生は、怠けようと思ったらどれだけでも怠けられるし、学ぼうと思ったらどれだけでも学べる時間である。」

さらに、

「教師は、いつも教室内に待機していて、学生個人の学習を補助するために存在する。できるだけ教師を上手に活用するように。」

と指示した。

■ 3. 読解フィールドワーク

(1) テーマをさがす

自分にとって関心のあるテーマを見つける。そのために、毎回の授業の初めに、「アエラ」「読売ウィークリー」などの週刊誌の記事の目次をインターネットでチェックさせ、興味をもった記事を手当たり次第に読ませていった。

(2) テーマを決定する

上記のテーマ探しのための読解作業を通して、留学生は自らの興味や関心のありかを発見する。

(3) テーマを深める

テーマを決定したら、同一テーマをあつかった文献を広く、深く読む。とくに、図書館のOPACシステムによる文献検索や情報収集のスキルは、大学での研究発表や論文作成のために欠かせない。また、各種のデータベース (Japan Knowledge, MAGAZINE PLUS, CiNii, 国立国会図書館のNDL-OPACなど) の存在も知らせ、効率的な検索の手ほどきをした。

■ 4. インタビュー・プロジェクト

(1) インタビュー内容の検討

テーマについて、書籍や雑誌やインターネットなどで、できるだけ多くの文字情報に当たるだけでなく、自分の体験や見聞、故国との比較を交えて、インタビューの質問項目を文章化する。

(2) 仮説の設定

テーマについて、文献から得た情報や、自分の体験や見聞をもとに問題提起をし、仮説を設定する。

(3) インタビュー対象者のパーソナル・データの収集

インタビューの対象者 (1人5名) の性別や年代や立場をできるだけ把握しておく。

(4) インタビュー対象者との連絡

インタビュー対象者と連絡をとって、事前に、インタビューの日時・場所などを約束する。

また、インタビューの目的や大まかな質問内容、所要時間などをインタビュー対象者に伝えておく。さらに、録音の可否、印刷・出版の可否も聞いておく。

(5) インタビュー（取材）

インタビューを実施する。聞きながら、メモを取ったり、録音したりする。

(6) データ作成

メモしたり、録音したりした内容を、忠実に書き起こす。書き起こしたデータは、デジタルベースと紙ベースで、5回に分けて、期日までに教務課に提出する。

(7) 事実関係の確認、校閲のお願い

レポートを書く前に、書き起こしたデータを当該インタビューイに読んでもらい、事実関係に間違いがないかどうか、校閲をお願いする。後日、校閲済みのデータを受け取る。

(8) 仮説との突合せ、見直し

インタビューの結果、わかったことを仮説と突き合わせて、一致点と不一致点を洗い出す。その結果、仮説がインタビューから立証されなかった場合、どこを、どのように修正したらよいかを考える。そして、その場合はもう一度、(2)にもどり仮説を設定しなおす。

(9) レポート作成

テーマについて、インタビューの結果、明らかになったことを、レポートにまとめる。レポートを書く際には、校閲済みのデータを踏まえて、自分が考えたことを書くよう指導する。また、レポートは、序論・本論・結論の三段構成で、最低 4000 字は書くものとし、ワード文書で提出する。

(10) 報告集作成

各自が仕上げたレポートを1冊の報告集にまとめて、大学の図書館に寄贈するとともに、今回のプロジェクトの関係者に謹呈する。また、報告集作成にあたっては、編集委員を留学生から選び、文体や書式の統一、校正、「まえがき」「あとがき」「目次」「奥付」の執筆などを担当させる。

6. 「インタビュー・プロジェクト」および「読解フィールドワーク」の成果

今年度の新たな試みは、「インタビュー内容の書き起こし作業」、そして、「インタビューによる校閲」である。

昨年度までの問題点の一つに、留学生が「事実」と「意見」を明確に分けて論述できない、という点が指摘された。学術的な文章は、随筆や感想文と違って、調査や観察や実験といった科学的な手続きを経て得られたデータを踏まえて、検証可能・追試可能な言辞で構成されなければならない。留学生の取り組むインタビューも、まがりなりにも学術調査の一つである限り、その成

果は、正確なデータを基礎に据えて、そこから導かれたものでなければならぬはずである。

ところが、過去の留学生のレポートは、往々にして「事実」と「意見」が峻別されない。すなわち「インタビューが述べた事柄」と「インタビュアーが考えた事柄」が一つながりの曖昧模糊とした記述になることが多い。これでは、せつかくインタビュー調査で新しい知見を得ても、仮説を見直すことができない。

そこで、今年度は、最終レポートを、序論・本論・結論の三段構成で提出させる前に、5回のインタビューが終わるごとに、インタビューの受け答えをそのまま書き起こさせ、中間レポートとして教務課に提出させることにした。そのためには、取材中のメモだけではおぼつかないので、できるだけボイスレコーダーにインタビューのやりどりを録音させるようにした。

留学生にとって、この書き起こし作業は意外に困難な作業であった。まず、日本人学生と違って、相手の発話を正確に聞き取ることができない。また、たとえ聞き取れても、話し言葉を書き言葉に移し替えることができない。聞いてわかる日本語と、文字に落として読み取れる日本語は、おのずと違うのである。たとえば、話し言葉は、往々にして主述が不对応で、原因と結果が錯綜している。また、言い淀みや言い間違いも頻出する。それを書き言葉で綴りなおすには、大げさにいえば、編集の力量が必要とされる。書き起こしは、一見、頭を使わない単純作業のように見えて、実は今まで培ってきたありったけの日本語力を注ぎ込まなければ完了しない、過酷な課題だったのである。

このように青息吐息で練り上げた中間レポートを、提出前に、くだんのインタビューイに見せて、校閲をお願いした。そこで留学生は、また徹底的に加筆・修正の憂き目(?)にあう。もちろんお忙しいインタビューイには、「斜め読みして事実誤認だけを指摘してくだされば十分」とお伝えしたのだが、多くの教職員の方々は、日本語教師顔負けの朱入れや懇切なコメントを添えてくださり、まったく恐縮の至りであった。こうして、お1人のインタビューイは、インタビューの時間・場所の約束、インタビュー、校閲と、都合3回、同じ留学生と会って言葉を交わしたことになる。

7. インタビューに応じてくださった教職員の声

毎年、書くことだが、今年もインタビュー・プロジェクトを通して、留学生が本学の教職員や学生と、社会的な問題について、率直に意見を交換できたことはたいへんよかった。双方にとって、気づきを誘発する出会いが何件かあったと思う。留学生は、多様な日本人の考え方に触れて、慣れ親しんだステレオタイプな日本(人)観を修正できただろうし、日本人は、日頃、不思議にも疑問にも思わない質問を留学生に突きつけられて、あらためて考えたことも多かったのではないだろうか。

ところで、インタビュー・プロジェクトでは、毎年、1回のセッションが終わるたびに、インタビューイから「評価表」なるものをいただいている。本稿末に Appendix として、評価表のフォーマットを載せたので参照していただきたい。

当然ながら、インタビューの善し悪しを決めるのは当事者だけである。本プロジェクトの主宰者は梅村だが、私は基本的にインタビューの現場には立ち会わない。そこで、インタビューイの皆様には、重ね重ねまことにお手数ながら、インタビューをした学生のマナーや日本語能力について、「評価表」の末尾に短いコメントをいただいている。それを、順不同でご紹介し、感謝の意に代えたいと思う。

- ・日本人として当たり前と思って気付かない点をたくさん疑問に思っていて、探究心の強い、熱心な学生さんだと思いました。
- ・緊張されていたせいか、発音の聞きにくい単語が結構ありました。話し方は自然で答えやすかったです。
- ・内容がとても難しいものがあり、困ったところが一部ありました。
- ・質問のポイントがわかりやすく、テーマについてよく勉強しているという印象を受けました。たいへん礼儀正しく、明るい方で、こちらも楽しかったです。
- ・自分の考えをしっかりと持って、インタビューの中でいろいろと勉強しようという気持ちがわかりました。
- ・こちら側が話した内容や言葉で、わからないところが出ると、きちんと確認できていました。自分の気持ち（感想など）を、インタビューのじゃまにならない程度に自己開示できていました。
- ・1つ1つの質問をもっと掘り下げて、具体的に聞くべきです。「～についてどう思いますか」と問われて「ひどいと思います」とか「可哀そうだと思います」としか答えられないことが多かったです。
- ・事前に準備がなされていて、中国の事情やご自分の考えを交えながら話を進められました。とてもよかったですと思っています。ただ 30 分程度と時間が短かったのですが、私は大丈夫だったのですが、私への遠慮（配慮）だとすれば、申し訳ないことをしたと思っています。
- ・インタビューのテーマが中々難しいもので、事前に十分な準備ができませんでしたが、私にとっても、勉強をするよい機会を与えて頂いたと感謝しています。当日は、本当に礼儀正しい留学生でしたので、たいへん気持ちのよい充実した時間を過ごすことができました。日々業務に追われている中で、一服の清涼剤のような効果をもたらしていただいたように感じました。
- ・初歩的な質問が多すぎて、ちょっとモノたりないです。質問をもう少し考えて、もう一度や

ればどうですか。

- ・質問に答えやすいように、終始にこやかに助言を出しながら話をしてくれた。
- ・大変真面目な方でした。彼女が事前に調査したデータの結果と、私の答えが合わなかったの
で検証になっていないかもしれません。
- ・とても好青年に感じました。受け答えも自然で、話しがもう少しですが、聞き取りは問題な
く、丁寧にメモしていたのが印象的でした。ちらっと見たところ、日本語の書きとりもでき
ていました。
- ・誠実で、話をさえぎることなく、よく聞いておられました。下調べも充分されていました。
- ・弁当や冷や飯など、日本と中国の食生活の違いについて、理解してくれたように思います。
全体的にはきはきとして、よい印象でした。設問が良かったのかもしれませんが。
- ・日本語がききとれないと言うより、何を言わんとされているかが分かりにくいことが1～2
回ありました。

2008年 月 日

インタビュー・プロジェクト 評価表

学生氏名 _____

評価者氏名 _____

- | | | | |
|--|-------|---------|--------|
| 1. インタビューを依頼するときの学生の態度や言葉遣いはどうでしたか。…… | よかった | 普通 | わるかった |
| 2. 学生から、あらかじめインタビューのテーマについて説明がありましたか。…… | あった | | なかった |
| 3. インタビューは、約束の時間から始まりましたか。…… | はい | | いいえ |
| 4. インタビューの質問内容は、テーマに沿った適切なものでしたか。…… | 適当だった | 普通 | 不適当だった |
| 5. インタビュー時のあいづちやうなずきは適当でしたか。…… | 適当だった | 普通 | 不適当だった |
| 6. インタビューのとき使われた日本語が聞き取れないことがありましたか。…… | あった | ときどきあった | なかった |
| 7. インタビューのとき、学生は記録をとっていましたか。…… | はい | | いいえ |
| 8. インタビューが終わったとき、学生はきちんと感謝の意を表明しましたか。 | はい | | いいえ |
| 9. 今回のインタビュー全体を通して、当該学生から受けた全体的な印象を、短く書いてください。…… | | | _____ |
| | | | _____ |

* ご協力ありがとうございました。